

## 親密性の権力と植民地主義

### —性愛と権力にかんする基礎的考察—

池田 緑\*

#### 要 約

制度的には解消されたにもかかわらず、実質的に植民地主義が継続している状態をポストコロニアリズムは分析してきたが、男女差別をめぐる状況は、まさにその典型である。男性社会は親密性とモノガミーで女性の想像力を奪い、従属させている。大杉栄の「多角恋愛」の概念とその実践の検討を通じて、男性権力から切り離された新しい親密性の在り方を検討する。

#### 1. ポストコロニアリズムをめぐる問題

##### 1-1. ポジショナリティの問題

差別問題や格差問題を筆頭に、世の中には様々な不平等や不公平が存在している。それらの問題をどのように認識し、アプローチし、解決するかには様々な道筋が考えられる。たとえば不平等な事態を「差別」と捉えるか、「格差」と捉えるか、ともにその不平等の解決を目指すアプローチであるとしても、その射程は微妙に異なる。どの問題にどのアプローチを適用すべきかは、それぞれのケースごとに考えられるべき問題であるといえる。

さらに言えば、1つの問題に対して1つのアプローチのみが適しているとはかぎらない。現実の事象は複雑であり、1つのアプローチのみですべてが解決することは、ほとんどない。また、多くの社会問題は複雑に絡み合っていて併存している。中核的な問題が存在しているとしても、別種の問題

も同時に存在していることがほとんどで、あるアプローチによって中核的な問題が解決したからといって、その問題にかんするすべての不平等や不公平が解決するともかぎらないのである。また同じ問題でも、“ポジショナリティ”という概念が明らかにしてきたように、個々人の政治的な位置性によって、問題の所在はつねにズレを生じざるをえない場合もある。

問題解決への最大の障害は複数の問題が複雑に絡み合っているために、不平等や不公平の解決がほとんど不可能と思えるほど巨大な障壁が存在しているかのようにみえてしまう点にある。このことが、不平等を解決しようとする者に果てしない道のりを想起させ、想像力と解決への意思を奪ってしまうのである。

必要なことは、慎重に問題を切り分けて場合分けをし、それぞれの問題に対して合致すると思われるアプローチを組み合わせ採用することである。しかしながら、その問題化とアプローチに

---

\*大妻女子大学 社会情報学部

も、一種の“要領”のようなものがあると思われる。たとえば「差別」や「格差」といった概念も“効率がよい”アプローチの一つではある。“効率がよい”というのは、解決すべき問題の少しでも多くの領域を説明可能という意味である。また、特定の言葉や概念を適用しないかぎり問題化できない部分も存在するだろう。要は、対象とする事柄の内容に応じて、問題化する概念やアプローチを適宜組み合わせる必要があるということである。

このようなことを論ずるのも、私自身のポジショナリティが関係している。私は日本人男性であり、現在までのところおそらく“ヘテロセクシュアル”である。日々体調の不調はあるものの、目立った“障害”もない。そのような者が近代社会を生きるということは、支配者、差別者を生きるということにほかならない。なぜなら、「日本人である」ということは、アジアへの支配、沖縄・アイヌへの植民地主義、在日コリアンへの植民地主義等の上に、日々の生活が築かれているということであり、「男性である」ということは、女性への差別の上に日々の生活が成り立っていることを意味する。いわゆる「健常者」であることは、「障害者」の社会参加を排除することによって自身の生活が成り立っていることを意味し、「ヘテロセクシュアル」であるということとは、“ホモセクシュアル”への抑圧の源泉である。もちろんここに列挙したことは、私というポジショナリティによって引き起こされる権力関係のごく一部にすぎない。

そのように、差別者としてしか生きざるを得ない私が、そのポジショナリティから逃れようと、換言すれば差別者であることをやめようと考えれば、すべての権力関係を解消するしか方策はない。もちろん、個別の権力関係の解消に努めることは重要である。社会運動にかかわることも重要だろう。しかし、個々に列挙しただけでも、多くの権力関係において私はすでに権力者であり差別者である。そして人生は短く、私のポジショナリティから提起されるすべての問題に対して運動にかかわることは不可能である。もちろん、相対的

に親しい人々との間に横たわる差別関係や権力関係の解消のために努力を続けることは必要である。しかし、自分から遠い問題と感じ、傍観、あるいは無知でいる状態こそが究極の差別の形態でもあるのだ。このことは、沖縄への米軍基地集中を遠い場所の問題と考え、多くの日本人が沖縄人の犠牲のうえに経済発展を続けてきたことを想起すれば充分だろう。

ポジショナリティという概念を導入することによって明らかになるこれらの権力性は、基本的には個人の人格や意思とは無関係な構造的な問題である。しかし、構造的な問題ではあっても、その帰結は個人的な経験となっており、個々人の頭上に降ってくるのである。たとえば差別による暴力や痛みは、個人の身体を通じて経験される。そして、そのような差別や権力を解消することは、構造的な問題であるがゆえに困難と感じられてしまう。しかも、たとえ1つの権力関係を解消できたとしても（それ自体一生涯をかけての闘争となるだろうが）、すでに述べたように、私は多くの権力関係の中に存在しており、他の関係は依然存続しており、依然として私は差別者であることから逃れられないのである。その結果、一時は差別や権力を解消したいと考えたとしても、多くの人々は、世の中とはそういうものだ、と開き直り、そのことを考えなくなる。そして、そうやって導かれた無関心がさらに差別や支配を強化してゆくのである。

その途に陥らずに、しかも辛抱強く差別関係を解消しようと志すならば、自分の関係する差別・権力関係を見通す視点を複数準備することから始めなければならない。その試みの一つとして、私は植民地主義という概念を提起したい。誤解のないように言えば、これはグランド・セオリーの構築を目論むものではない。グランド・セオリーには、必ずそこから漏れ落ちる部分があり、そのことが事態の理解と解決を妨げる。すでに述べたように、一つの問題ですらその内容は複合的であり、複数のアプローチの組み合わせが必要なのである。ここで企図していることは、複合的な問題のなかで、少しでも大きな領域を理解可

能なアプローチ法を整備することなのである。

## 1-2. ポストコロニアリズム論の射程

さて、「差別」や「格差」といったような概念と共に、社会の不平等を考える際に“効率がよい”と思われるアプローチが、植民地主義（コロニアリズム：colonialism）である。ここで注意が必要なのは、コロニアリズムという概念は土地とのみ結びついた概念ではないということである。確かに、植民地に植民地主義は間違いなく存在したが、それは植民地においてのみ見られたことではなく、内国植民地や従属理論といった用語が存在していることから明らかなように、宗主国の内部や、明示的（法制度的）な植民地関係が消滅した関係においても、植民地主義は存在し、存続してきたのである。

ポストコロニアリズムという新たな概念は、その事情を問題化しようという含意をもっている。野村浩也が指摘するように、法制度的にはすでに植民地関係が解消された関係においても、事実上、植民地的状況は続いており、非明示的な権力関係として植民地主義は存続している、ということが、ポストコロニアリズムという概念の含意である（野村、2005：21-23）。すなわち、ポストコロニアリズムとは、非明示的になり、より洗練され、より巧妙に継続されている植民地主義を考える概念なのである。

この視点をさらに掘り下げれば、植民地主義は必ずしも土地の間の不平等に対する概念に留まらず、「自己の利益のために他者を資源化しようとする心性とその手法」を指し示す概念として捉えなおすことができるだろう。そのように植民地主義を再定義するなら、たとえば、いままで階層（階級）として捉えられてきた諸問題にも、経済的な下部構造の問題としての階層論や階級論だけでは解明しきれなかった心性の領域にかかわる問題が存在していることがわかるだろう。

それは、心的傾向であり、ウェーバー的意味における心的態度（Ethos）としての植民地主義である。私は、そのことを「心的傾向（心性）としての植民地主義」として問題化した（池田、2005

a；2005b；2006）。他者を自己の資源として動員しようという欲望、資源化することを当然のことと考え、自分には、理不尽にも、その権利があると考え、それが、植民地主義の核心である。実際のところ、植民地主義者（コロニヤリスト：colonialist）は、追い詰められてやむにやまねず、涙を飲んで、他者を資源化し、植民地主義を実践しているのではない。他者を資源化し、それによって自己が何らかの利益を得たいから、植民地主義を実践してきたのだ。

このような見解には、つねに反論が予想される。たとえば、近代日本は欧米列強の植民地化の波の前に対抗的に植民地を獲得せねばならず、そうしなければ日本も植民地にされていた、というものがその典型例である。あるいは、近代社会はドメスティック・イデオロギーに満たされており、男性は女性を養うために、性別役割分業に従わざるをえなかった、というものも同様である。しかし、これらの見解は言うまでもなく責任転嫁のロジックにすぎない。たとえ日本が対欧米の関係において被植民地化の危機にあったとしても、それは日本と他のアジア地域との関係にはロジック上はかかわりのない話である。このロジックは典型的な抑圧移譲であり、たとえ日本が植民地化されそうであったとしても、それをもってアジア地域を植民地化したことを正当化できるものではない。また、男性が公的領域において競争関係にあったからといって、女性を家庭に閉じ込めておくことは、性別役割分業を通じた女性への抑圧を免罪しえない。日本人はアジア人に抑圧を移譲せずに西欧諸国への反植民地闘争の道を考えることはできたし、女性を家庭に閉じ込めて抑圧する前に、男性個人は性別役割分業システムへの反抗の可能性を考えることもできたはずだからである。

このように、心的態度として植民地主義を理解し、他者を自己の資源として動員しようという欲望と考えること。他者を資源化することを当然のことと考え、自分には、理不尽にも、その権利があると考え、心性としてコロニアリズムを捉えることは、私のポジショナリティによって引き起こされる様々な抑圧関係を考える際に、応用可能性

を持つ。コロニアリズムを、土地とのみ結びられた概念ではなく、自分の心の内に存在する傾向とするなら、たとえば、私が男性であることによって享受している利益や権力を、コロニアリズムの視点で考えることが可能になる。本稿で問題とする男女関係においては、男性が強いている抑圧において、資源化されるものの中核（植民地に相当するもの）としては、女性の無償労働力と性的能力を含みプロダクション能力が代表といえる。

そして、心的傾向としての植民地主義を考える際に重要なのは、その手法である。植民地主義には、当事者の関係性の文脈にかかわらず、ある種の共通した手法が存在している。逆にいえば、その手法を見極めることによって、不平等の背後に隠されている植民地主義を炙り出すことも可能と思われる。この視点から、私はかつて主要な植民地主義の手法を6つに分けて考察した（池田，2005a）。またその際に、被抑圧者の情報経路を破壊し、現状の被支配的地位以外の在りようを、被支配者に想像させないこと、すなわち被抑圧者から想像力を奪うことが植民地支配の核心であると論じた（池田，2005b）。ここではその詳細を繰り返さないが、総じて植民地主義の手法の特徴は、被支配者に自らを嫌悪させ、支配されている現実を正当なものとして受け入れさせる点にある。そしてそれ以外の可能性を想像することを禁止することが肝要なのだ。

## 2. ポストコロニアルな男女関係

### 2-1. 他者承認とコロニアリズム

このことは、男女格差、性差別といった一群の問題にも、かなりの部分で当てはまる。性差別は、経済的な問題や暴力によってのみ実現可能になっているのではない。端的に言えば、女性自身が、女性を嫌悪し、その結果として自らをも嫌悪し、自分の価値を見いだせず、自尊感情と自己評価を破壊され、つねに他者（=男性）に価値づけをしてもらわなくてはならず、その結果として男性の権力を共犯的に支えることによって可能となっている。これらの手法と状況は、植民地主義

そのものであり、男性たちは日々女性に対してコロニアリズムを実践していることになる。

さらに言えば、かつての民法規定にみられたような男女差別条項は、女性の再婚期間規定を除けば、ほとんど法的には解決されている。にもかかわらず、男女差別は歴然と存続し続けている。明示的な差別、法制度的な不平等はなくなったにもかかわらず、現実には不平等や差別が存続している状態。これこそポストコロニアリズム論で問題とすべき事態である。男女関係は、典型的なポストコロニアルな関係であるといえる。

そのようなポストコロニアルな権力がどのように形成されているのかを考えるために、私は他者承認（他者による承認）をめぐるポリティクスについて分析した（池田，2008）。多くの女性たちは、生育歴の過程において、身近な男性および男性中心的な社会によって自己評価と自己承認の契機を奪われがちである。そのため、自尊感情も低くなりがちで、つねに他者、それも社会的な権力と決定権を保持した男性に自身の価値を位置付けてもらうというねじれた戦略をとりがちになる。

そこで求められている承認は、人格的な承認である。しかし現実には、女性の承認は圧倒的に性的承認として与えられる。それは、異性愛の恋愛システムがリプロダクションを中心に構成されている帰結でもある。そこで女性たちが受け取るのは、男根に象徴される男性の権力の系譜、すなわち《ファルス》である。その《ファルス》をめぐる、女性たちは競合状態におかれ、女性同士の連帯は未然に封殺されてしまう。その結果、女性たちは、ファロゴサントリズム（男根ロゴス中心主義）にまつわる悩みに押しつぶされ、《ファルス》を求め、それを与えられないことによるメランコリーに陥って、社会性を喪失してゆく。その女性の無力化がさらに男性の権力を支えることにつながってゆく（池田，2008：50-55）。

これは、男女共同参画社会になって多くの女性が社会に進出し、経済的な自立が可能になった現代においても、依然根強く女性を縛っている男性の権力作用である。たとえば、仕事も男性並みにこなし、経済的に自立しているように思われる女

性でも、あるいはジェンダー論の洗礼を受け、自立したいと願っている女性においても、ことモノガミーがかかると、驚くほど保守的になり、むしろモノガミーを通じて女性規範に最終的には回収されてしまうケースも少なくはない。この状況は、いわゆる東電OL事件を題材に取った桐野夏生の小説『グロテスク』で、産業社会で業績原理に邁進する女性が、男性社会の見えない天井（グラス・シーリング）にぶち当たったとき、一気に女性原理に傾倒し、男性による性的承認を求めて崩れてゆく様として、文字どおりグロテスクに描かれている（桐野，2006a, 2006b）。

実際、働くことや社会的権利の面においては、主張も十分に明確な女性が、ことモノガミーが絡んだ途端にグダグダに崩れてしまうことが、あまりにも多いように感じられる。働いて、自立して、自分だけの幸せを求めているはずが、同時に男性から性的な存在として見られることを欲する。そのような視線を嫌悪しつつも、その視線を向けられることで安心した経験は、多くの業績原理に生きる女性が経験していることだろう。

このことは逆に言えば、どれほど個人的には善良なパーソナリティをもつ男性であっても、あるいは女性の権利拡大を真剣に考えているような男性であっても、ことモノガミーが絡むと、驚くほどあっさりとして収奪者・支配者のポジショナリティを有してしまう、ということでもある。なぜなら、セクシュアルな視線、セクシュアルな一瞥を送るだけで、その支配は半ば達成されてしまうのだから。その意味で、男性が女性に対して発動するコロニアリズムは、承認と性的回路を通じて強烈に、かつ効果的に作用していることがわかるだろう。

しかもやっかいなことに、男女間のコロニアルな関係は、つねに誤読されるような言語で表現されている。これもまたポストコロニアルな状況の特徴である。たとえば「愛」という言葉は、現実には無償の労働、それも女性から男性への無償労働によって計測されている。男性側からみた場合、女性からの愛とは、収奪と同義である。しかも、本質主義言説によって、思いやりの心、優し

さ、といった特性が女性に付与され、女性は愛の発動主体としての役割を引き受けさせられる。女性は社会における「愛担当係」である。それは、「愛」というロジックを用いて、実際には収奪が行われていることを隠蔽している。

その一方で、男性が発動する「愛」は、ながらく性愛（sexual love）に限定されてきた。そして性愛を女性が発動することはタブーとされ、セクシャル・アクティビティにおける能動性は、男性に独占されてきた。男性は、様々な手法で性愛を発動し、また言説においてもその性愛の内容や性向は、たとえばボルノグラフィという形で記述されてきた。しかし性愛の発動を禁止されてきた女性にとっては、そもそもその内容や質を問われることはなかった。女性の性愛とは、男性が発動した性愛を受け入れるか否かのみによって判定されるものであった。性愛において受動的な存在であることが求められてきた女性には、女性自身の性愛の嗜好や傾向は一切問題とされず、問われもせず、ただ男性が発動した性愛をどのように受け入れるかのみが、焦点とされてきたのである。

しかも、そのような性愛の受諾は、まさに彼女自身の存在を証明する、あるいは価値を創造する行為として女性によって希求されてしまう。それは言葉を換えれば、《ファルス》を受け入れるということであり、女性が女性として存在するということは、男性の性愛を受け入れ、《ファルス》の秩序にひれ伏すことによってしか、獲得不可能であった。そして男性が独占してきた言説の流通の権力によって、女性にはそれ以外の可能性を想像する情報経路すら封鎖されてきたのである。その情報経路の封鎖過程では、とくに性愛を中心としたモノガミーの力は大きく、女性に対して非常に強い拘束力をモノガミーの規範は行使してきた。モノガミーに絡むあれこれは、最終的に男女間における権力関係を規定する重要な要素であり、べつの見方をすれば、ジェンダーから自由になろうと試みる男性や女性を、ロマンティック・ラブの性規範に引きずり戻す「最終兵器」なのではないか、という疑念を私はずっと感じてきたのである。

## 2-2. 親密性の権力

社会的に自己を確立しようとする女性にとって、最大の障壁は何であろうか。もちろん、雇用状況や間接差別などの制度的／非制度的な問題は重要であるし、大きな影響力をもっている。しかし、真に影響力をもっているのは、想像力が奪われていることである。多くの女性にとって、結婚を頂点としたロマンティック・ラブはなじみ深いものである。それは幼少期から繰り返し接してきた支配的言説であるからだ。しかし、いったんそれ以外の幸せのビジョンを想像しようとした途端に、現在の状況以外の自分を想像できなくなってしまう。いうまでもなく、男性社会の言説がその想像力を奪い続けてきた結果である。今の自分ではない、別の自分。そのような自己像が、殊に女性においてはきわめて想像しにくくなってしまふ。

そのような状況と、自己評価の低さ、自己承認不全が重なったとき、多くの女性はモノガミーの権力に圧倒されることになってしまう。性的な視線を投げかけられることを嫌悪しつつも、それがないと不安になってしまう理由はここにある。彼女らは自分の価値が美を含む性的な文脈（リプロダクションの文脈）においてしか評価されないことを知っている。しかしそれに代わりうる自己評価の契機がうまく獲得できていない場合、たとえ性的な回路を通じてでも、社会の決定権者としての威信をもって自己を評価してくれる男性を、強く求めてしまうという事態にいたってしまう。男性の性的な視線を通じてしか、自己の価値を発見できなくなってしまうのである。したがって、美と若さについて多くの女性は敏感にならざるをえない。国民国家社会の異性愛男性のセクシュアリティは、リプロダクションの可能性からすべからく若い女性に発情するものであり、男性間のホモソーシャルな基準から社会に支配的に存在している美の基準に合致した女性を好むものであることを、無意識的に知っているからである。

その結果、多くの女性は、美とセックスアピールを磨き上げ、さらには男性に献身し役に立つことで自分の価値を男性に発見してもらおうという

戦略を採る。そして自分の価値は、男性に「愛される」こと、すなわち性愛を発動されることによるのみ生じる、とまで考えてしまうようになる。自己の要求を抑え、男性のために尽くす女はこのようにして作り出される。

論理的にも、過去に収奪されものが多い女性ほど、自己評価への芽を摘まれてきた女性ほど、この傾向は強くなるだろう。たとえ「美貌」を備えていようが、業績原理において高い能力を発揮していようが、そのようなこととは関係なくこの傾向は顕在化する。男性との関係において、なぜそこまで尽くすのかと疑問に感じるような女性は、このような隘路に嵌っているのである。また同様に、頭では男性の権力を嫌悪していても、それを振り切って自立へのジャンプができない女性、変化を恐れて立ち止まってしまう女性も同様にこの罠に嵌ってしまっている。

それは別の言葉で表現するなら、《ファルス》への同化欲求でもある。生得的に《ファルス》をもつ男性に、自分の価値を認められることで、自分にも《ファルス》が継承されるのではないかと錯覚しているともいえる。しかし、多くのコロニアリズムの実践過程で明らかのように、同化とは、被抑圧者が自分に貼られた劣位のレッテルを内面化し、自己を嫌悪し、劣位のレッテルを貼った抑圧者にあこがれ、自分を殺し、抑圧者に自らを重ねる心性である（野村、2005：90-97）。そしてそれは決して達成されることはない。なぜなら、同化の目的は、被抑圧者を抑圧者に憧れさせることであり、それによって葛藤の刃が抑圧者に向かわないように、事前に抵抗の芽を摘むことだからである。これは、植民地主義の基本的な支配の手法である。同化圧力は、あくまでも憧れさせることが目的であり、同じ土俵に被抑圧者を引き上げてしまえば、その効果は期待できなくなるからだ。

この《ファルス》への同化圧力は、つねに女性に男性の権力への憧れを抱かせ続け、そして永遠にそれを与えないという男性社会の戦略である。さらに、それを維持するためには同化への淡い期待をもたせ続けなければならない。そしてその期

待は、性的な親密性 (intimacy) という回路を通じて供給されてきたのである。

じつのところ、この親密性こそ、モノガミーと同化権力をつなぐ鍵であり続けた。また、ロマンティック・ラブとその帰結としての家族を結ぶ鍵でもあった。それは同時に、ギデンズが指摘するように、性的で原初的な欲望と男女間の精神の結合とを融合させると、人々に信じさせる回路でもあった (Giddens, 1992=1995 : 72-73)。

性と心の一体化という概念は、ロマンティック・ラブの中核である。それゆえに、その両者を結ぶ証と考えられた親密性は、とくに女性にとってきわめて重要な指標となってきた。男性の多くが、女性との関係を性的なものを中心に組み立てて認識しているのに対し、女性は性的関係そのものよりも、性愛を含めた親密性によって男性との関係を認識しているのはこの理由による。多くの女性にとって、クリティカルに重要なことは、どのような性交渉を行うかではなく、どのような親密性を築けるかなのである。それはたとえ性的耽溺の状態にみえる女性においても例外ではない。彼女らは親密性をきわめて直截的ないきり立ったペニス (= 《ファルス》) によってしか確認できない状態におかれてしまっているのである。ギデンズは、親密性を求める女性心理の背後にあるロジックを次のように指摘している。

女性は、たんに誉めそやしてもらうだけではなく、自分が正しく評価され、尊重されているという事実を口で言ってもらうことを求めているのである。女性は、幼い頃に自己を自己陶酔的に確認する機会を奪われたために、その後は自分が敬愛している他者が提供してくれる愛情という鏡のなかだけにしか安心感を見出すことができないのである。

(Giddens, 1992=1995 : 191-192)

また藤本由香里は、性的関係が自由になったと思われる現代でも、多くの女性が「特権的な愛」に至上の価値を見出していることが、モノガミーの源泉であると指摘しているが (藤本, 1999 :

61)、それは同時にモノガミーを通じて男性が女性を支配する道筋を示しているといえる。すなわち、「誰かの1番になる」ことが、多くの女性にとってきわめて切実な課題となり、それは性愛を通じた親密性によって表現され、そのような親密性を示す男性こそが最高の価値をもつ存在であり、そのような男性のために身も心も捧げることになってしまうのである。その結果、女性たちは特定の男性が他の女性とどのような親密性を共有しているかについて、自己との関係と比較し、一喜一憂することになる。嫉妬と表現されるこの感情は、親密性獲得競争における、自己の価値、全存在を賭けた切実な利害と直結した、存立基盤を左右する状況への認識と危機感が表出したものである。それゆえに、ときには殺人にまで発展するような激しい感情を呼び起こすのである。十分に聡明で自立もしている女性たちですら、親密性の発動にかんする局面において (その多くは性的な承認行為とワンセットになっている)、驚くほどの脆弱さと自己放棄を示してしまうのも、これらの理由による。そして親密性という回路を通じて、男性は容易に女性を操作し、支配することが可能となる。かつてラディカル・フェミニストが性の解放を論じたとき、それが女性の解放と事実上同義として認識されていたのは、この構造が存在しているからと考えられる<sup>1)</sup>。

さて、モノガミーと親密性が女性の内面的自立を阻害する男性権力の行使であるとして、次に浮かぶ疑問は、私に気がつく程度のことは、今までにも気がついた人がたくさんいたはずではないかということである。のみならず、それを解体しようとした試みもあったのではないかということであった。それはどのように試みられ、どのような知見をもたらしてくれるのだろうか。

### 3. 「多角恋愛」という“実験”

#### 3-1. 日蔭茶屋事件

女性との対等な関係、それも性関係といった親密性を含む対等な関係は過去にどのように模索されてきたのだろうか。その試行錯誤は膨大である

し、文学や記録に留められているものだけでも多くのものがあるだろう。

ここでは、対等な関係性を模索したようにみえながら、見事に失敗したといわれている例をもとに、親密性と権力の関係について改めて考えてみたい。失敗例にこそ、相克すべき親密性の焦点が顕わになっていると考えたからである。またここで採りあげるケースの場合、男女双方の当事者が記録を残しているという意味でも、検討しやすい事例であると思われた。それは1916年（大正5年）に起こった日蔭茶屋事件である。大杉栄をめぐる四角関係と日蔭茶屋事件は、一般的によく知られている事柄・事件であるが、論点を明確にするために簡単に経緯を概観したい<sup>2)</sup>。

この関係の主要な登場人物は4名である。社会主義者およびアナキストとして有名な大杉栄、その同棲相手の伊藤野枝、大杉と性的関係にあった新聞記者神近市子、そして大杉の妻、堀保子である。

福岡県に生まれた伊藤野枝（1885-1923）は、女性史上の著名な思想家である。上野高等女学校を優秀な成績で卒業後、上野高女の教師であった辻潤と結婚するが、青鞥社の活動に参加、1915年には雑誌『青鞥』の編集を平塚らいてうから引き継ぐなどして、女性解放の論客として知られていた（後に『青鞥』は伊藤の手によって廃刊される）。結婚制度否定の論陣を張り、1921年には山川菊栄らとともに、赤爛会の設立にもかかわった。1923年、大杉栄とともに虐殺される。

長崎県に生まれた神近市子（1888-1981）は、女子英学塾（現・津田塾大学）に在学中に青鞥社に参加、その後青森県立女学校の教師となるも、青鞥社参加の経歴が問題となり退職。その後東京日々新聞社の記者となる。当時としては珍しい経済的自立を果たしていた女性で、いわゆる“新しい女”の一人と目されていた。しかし、後述の日蔭茶屋事件による服役後に結婚し、中産階級の性規範の代弁者の一人となる。戦後は衆議院議員も務め、1957年の売春防止法の成立に尽力した。

堀保子は作家堀紫山の妹で、また社会主義者堺利彦の義妹であり、1906年に大杉と離婚した。文

筆活動も行っており、大杉とは同志的關係にあったといわれる。ただ持病があり体が弱く、子供には恵まれなかった。日蔭茶屋事件の翌1917年に大杉と離婚。大杉が虐殺された翌1924年に病没した。

大杉栄（1885-1923）は、明治末期～大正期を代表する社会思想家・アナキストとして八面六臂の活躍を行った人物である。同志であった幸徳秋水らが処刑された大逆事件（1910年）の際には、治安維持法違反で獄中におり難を逃れており、その後は堺利彦、山川均、荒畑寒村らとともに、日本の社会主義運動の中核を担った。大杉は学究肌であるにもかかわらず行動的でもあったといわれる。当時クロボトキン研究の第一人者であり、ダーウィンの『種の起源』の翻訳者としても知られる一方で、晩年の1923年には、日本を密出国して国際アナキスト大会に出席するためフランスへと出かけたり（大会自体は無期延期）、ある種のヒロイズムを呼び起こす行動様式と風貌で知られていた。関東大震災後の混乱が続く1923年9月16日、同棲相手であった伊藤野枝、甥の橋宗一（当時6歳）とともに、憲兵大尉甘粕正彦らによって虐殺された（いわゆる甘粕事件）<sup>3)</sup>。

大杉は1906年に堀保子と結婚しているが、これは法的婚ではなく事実婚であり、別姓を名乗っていた。このこと自体、当時の状況を考えれば先進的なことであった。多くの論者が指摘していることだが、大杉は一面では徹底した自由主義者であり、個人を縛る因習的な婚姻制度を明確に否定していたのである。

大杉と神近は、大逆事件後の社会主義の「冬の時代」に、知人の紹介でアナキズムの研究会において知り合った。その後、語学に堪能な神近は大杉よりチェルニチェフスキーの『何をなすべきか？』の翻訳を勧められ、その過程で2人の親密さは増し、1915年（大正4年）秋には恋愛関係が築かれるようになった。

一方で、大杉と伊藤が親密さを増してゆくのは同じく1915年、足尾鉍毒事件の谷中村問題で大杉と意気投合したことがきっかけであった。伊藤の当時の夫であった辻潤が谷中村問題に悩む伊藤に

対して冷淡であったこともあり、急速に大杉と伊藤は同志的な愛情を育むようになる。翌1916年2月には大杉と伊藤の間でラブレターの交換が始まり、4月に伊藤は辻と離婚。一方で3月に大杉は堀と別居を始めていたが、そこに伊藤が転がり込んできて同棲が始まっている。

ここに世に名高い大杉をめぐる四角関係が出来あがる。神近は大杉との関係を理由に醜聞を嫌う新聞社から解雇されるが、語学力を生かして知人の仕事を手伝いながら自立していた。しかし辻との子供を抱えた伊藤（この子供は後に里子に出されている）と働いていない堀は自立のしようもなかった。この間、神近が大杉の（伊藤に対してすらも）経済的支えとなることもあったという。

1916年11月上旬、大杉を取り締まる側の内務大臣後藤新平への直談判によってまとまった金を手に入れた大杉は<sup>4)</sup>、必要な支払いを済ませた後、一人で神奈川県葉山に仕事に行くと言ったが、神近に伝える。しかし実際には伊藤と2人での葉山行であった<sup>5)</sup>。彼らは葉山日蔭茶屋に宿を取ったが、11月7日夜、疑いをもった神近が日蔭茶屋に到着するにおよんで、状況は修羅場と化した。

風呂上がりだった伊藤は、神近の姿をみると無言になり、3人で食事をとるも、伊藤はその晩のうちに東京に帰ると宿を出る。しかし鍵を忘れたと再び宿に戻り、その晩は3人で過ごす。翌8日、朝食後に伊藤は東京に帰り、日蔭茶屋には大杉と神近が残った。その晩、神近は大杉に憤懣をぶつけ、緊迫したやり取りがあったようだ。しかし話題が金銭におよぶにいたって、大杉は「ぼくが金を借りているものだから、君はそれをカサにきて暴言を吐くんだな。さあ、金は返す。これでわれわれは他人だ。あしたは帰ってくれ。帰らないなら、ぼくが帰る！」と言うなり、金を畳の上に叩きつけたという（神近、1997：172-173）。

その後、意を決した神近は以前より準備していた短刀を取り出し、寝入っている大杉の喉を突いた。幸い大杉は軽傷であり、数日後には搬送先の病院を退院している<sup>6)</sup>。神近は狂乱の中で宿を飛

び出し、浜辺等を彷徨った後、交番に自首。傷害罪で懲役4年の判決を受けた。控訴審で2年の判決に変更となり、服役した。これが有名な日蔭茶屋事件のあらましである。

社会主義者と“新しい女”の痴情騒ぎとしてこの事件は世間の注目を集め、連日その詳細が報道された。現在とは異なり、プライバシー保護といった観点のない時代のことでもある。また同時期には、枢密院副議長芳川顕正の妻、鎌子の心中未遂事件（1917年）、いわゆる白蓮事件（1921年）、作家有島武雄と婦人公論記者の波多野秋子の心中事件（1923年）と、婚姻制度の基盤を揺るがしかねない恋愛事件が立て続けに起こり、世間の関心を集めていた時期でもあった。そのため、日蔭茶屋事件は非常に有名なものとなり、現在に至るまで様々な視点から多くの文献や研究が残されている。したがって、四角関係の推移や事件の詳細はここでは繰り返さない（参考文献に挙げた各文献を参照されたい）。

### 3-2. 「多角恋愛」への批判

この時期、大杉は「多角恋愛（自由恋愛：フリーラブ）」という概念を神近と伊藤に対して提示している<sup>7)</sup>。考えてみれば、北村透谷らの文学者によって恋愛という概念が男女間の中心的なテーマとなって、まだ30年もたっていない時期である。この有名な「多角恋愛」という概念は3つの原則から構成されていた。

- ①お互い経済上独立すること
- ②同棲しないで別居の生活を送ること
- ③お互いの自由（性的すらも）を尊重すること

この3つの原則は神近と伊藤には、表面上は了承されていた（内心はともかく）。堀保子が同意していたかどうかは不明である（おそらく同意はしていないと推測できる）。ただし、それは現実にはまったく機能していなかった。第1に経済的に独立していたのは神近だけであり、主婦である堀と、乳飲み子を抱えて大杉の元に転がり込んできた伊藤はこの条件を満たしていない。のみなら

ず、大杉自身も神近から借金するなど、経済的独立を果たしていたかは疑わしい部分があった。第2に、大杉と伊藤は同居していたのだから、②の原則も破られている。神近がもっとも激しく嫉妬したのもこの部分であった。第3に、この関係の中で性的自由を謳歌できたのは大杉のみであり、他の3人は一方的に大杉の性的自由を「尊重」させられる立場にあった。たとえば杉山秀子は、この3番目の原則に対して「大杉が好きな時に好きな女と好きなだけ過ごすことの自由を主張しているにすぎず、男にとってもっとも都合のよい論理」と断罪している(杉山, 2003: 136)。

この日蔭茶屋事件は、一部には「悪い女に引かなかった不運」と評価する者もいるものの、多くの大杉研究者には、大杉のヒロイックなイメージとは異なる側面を示す事例として捉えられている。この3原則は当時のメディアにおいても伝えられ、とくに大杉の身勝手さが非難の対象となった。実際、大杉が神近に対してどれほど真摯に向き合っていたかについては、大いに疑問が残る。大杉は、伊藤との恋の経過を記述した「死灰の中から」において、神近との関係を「T新聞記者I子とあはい恋に戯れてゐた」と表現しており(大杉, 2004: 152)、伊藤に対する情熱に比べて神近へのそれは随分と真摯さを欠くものであったと言えるだろう。実際、事件当時より、加害者である神近に対する同情の声は強く(それは事件を担当した裁判官をも含む)、総じて被害者の大杉の身勝手さを批判する声が支配的であった。また、この一連の出来事により、大杉の年来の同志たちも離反してゆき、大杉は社会主義運動の中でも孤立感を深めてゆく。

この一連の出来事に対する後世の評価(というは大杉への批判)は、大きくは3つに分類可能である。1つめは、大杉のパーソナリティの狡猾さ、卑劣さに対する批判である。大杉は、自由主義や多角恋愛を理想として説きながらも、現実の言動としては自らの性的快楽の獲得に流れている部分があったと言わざるをえない。のみならず、性的快楽を得たいがために理屈をこねているのではないかと思われる部分すらあり、これは恋愛に

おける自由主義を語るようにみえて、自らの欲望を正当化していると指弾されても致し方のない部分もあった。

たとえば、伊藤との関係を神近に知られ、身を引こうとする神近に対して「俺は多角恋愛の実験を試みているんだ。君がついていけないのは、思想的未熟のゆえだ」と非難し、結果的に神近との性的関係を継続したこと(神近, 1997: 155)。あるいは、伊藤との三角関係に悩む神近に対して「あなたには理解がない。伊藤はよく理解している」と頻りに発言し(神近, 1997: 163)、神近の負けず嫌いの性格や嫉妬深い性格につけこんで、関係を維持しようとも試みている。また、伊藤に対しても交換したラブレターの中で、「娯楽のためのセクシュアル・ユニオン(性的結合)」の多様性を力説し、モノガミーにこだわりが残る伊藤との関係を維持しようと努めている(鎌田編, 2001: 66-67)。

神近は、日蔭茶屋事件の公判の中で「やはり主要な根本動機は、大杉が長い間理論を弄び、私の感情を踏みつけにしたのに対する憤怒だと思う」(岩崎, 1963: 317)という意味のことを述べており、大杉の神近に対する態度には、非難に値するものがあつたことは間違いない<sup>8)</sup>。

2つめは、「多角恋愛」という理想を語りつつも、大杉は実際には、理想を実践していなかったことに対する批判である。杉山秀子の批判がその代表的なものである。杉山は、経済的独立は神近のみが達成しており、他の3人は達成できていない時点で、大杉の3原則は最初から遵守されておらず、それを無理に実践しようとするれば、4人の経済的基盤となっていた神近に負担は集中し、さらにその神近への大杉の冷淡な態度が彼女を追い詰めたと指摘する(杉山, 2003: 136-140)。経済的問題のほかにも、大杉と伊藤は同棲しており、ここでも原則は破られていた。杉山の批判は、現実的な批判としては的を射ているだろう。杉山が大杉に対して激しく苛立っているのは、それらの原則がとくに破られているにもかかわらず、場当たりに関係を維持しようとした彼の不誠実さに対してである。それは神近や堀らの女性

たちに対しての態度のみならず、理論家・実践家としての大杉の基本的な態度への不信感となっている。この指摘は、大杉の弱さと狡さを正確に射抜いている。

3つめは、「多角恋愛」の概念そのものに対する批判である。これはさらに依拠する思想的立場に応じて、2つに大別可能と思われる。

まずは、社会主義的発想、すなわち経済的下部構造を重視する立場からの批判である。さらに言えば、革命が達成されること（階級闘争に勝利すること）の後に、女性の解放は実現されるという、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』を思想的背景とした批判でもある。日蔭茶屋事件に対しての、大杉の同志であった荒畑寒村のコメントは有名である。

荒畑は、「彼の認識には根本的な錯誤のあることを忘れていた」としたうえで、

いずれにせよ彼の理想的恋愛観は現実において失敗であった。我々の生活や観念を規制している現代社会の、客観的条件を変革することなくしては個人の自由も解放もあり得ない。現状のままの生活環境で恋愛だけ自由である筈がないのは、経済問題が彼らの恋愛を悲劇に終わらせた重要な一因であったのも明らかである。（荒畑、1975：379）

と論じている。ここでいう「客観的条件の変革」とは、いうまでもなく革命を指している。すなわち、経済的下部構造の変革（＝革命）なくしては、恋愛の自由もまたありえない、という批判である。この批判は一種の階級論であり、一面においては正しい批判である。男女間には階級に似た従属関係が存在していることは、マルクス主義フェミニズムが繰り返し指摘してきたとおりである。経済的対等性を含めた、階級性が解消されないうち、動員する資源や立場においてまったく対等な恋愛関係を築こうとすれば、そのしわ寄せが女性に一方的に集中することは間違いない。この意味で、当時の社会状況を考えれば、荒畑の批判は、一面の真理を突いているといえるだろう。

実際、堺利彦をはじめとして、大杉の同志たちから寄せられた批判の多くはこのような文脈によるものであった。

しかしこのような批判に対しては、それでは、革命が達成されれば自由な恋愛が可能になるのか、という疑問がわく。もちろん、荒畑が想定していたような革命は実現していないし、女性の経済的独立も完全に達成されてはいない。しかし、大正時代から比べるとはるかに女性の社会的進出が進み、女性の経済的独立も進んだ現代においても、自由な恋愛は困難であることは先に述べたとおりである。また、ラディカル・フェミニストたちが性支配を不平等の根源的問題の一つとして、男女の性愛の在り方を男性権力の源泉の一つとして位置付けてきたことからわかるように、性愛の在り方自体が、女性支配への権力装置であり、そのことは環境が変革されても、直接的には変化しないものなのである。

次は、この批判ときわめて似たものではあるが、時代的な状況を考えれば、大杉の「多角恋愛」は空論であった、あるいは、現在でも空論である、とする立場である。たとえば飛矢崎雅也の次のような見解が典型的である。飛矢崎は、神近が伊藤と大杉の関係を知って逆上した時にかんじて、大杉は神近に謝罪し別れるべきであったと述べた後、次のように論じる。

それを、空論的な「自由恋愛論」で粉飾し、事態をさらに混迷に向かわせたことは、彼一代の過ちであった、自由恋愛を言うならば、それは男女をめぐる条件が同じでなければならぬ。それを無視して恋愛の自由を言うことは、当時の風習、習慣、経済的環境などの諸々の条件を無視しており、さらにいえば女性への差別の上に胡坐をかいている。そして、たとえ環境的条件が整えられたとしても、男女の生理上の違いは残る。そうした事を無視した大杉の提案は、もはや理論というべきものでもなく、机上空論的なものさへ超えて、妄想でさえある。彼は、実際の現実の中で彼のいう恋愛が女性にどのような損失を

もたらずのかということにまったく無頓着であり、ただ女性に甘えていたとしかいえない。(飛矢崎, 2005:146)

飛矢崎の論点は、第1に当時の諸条件を無視して「自由恋愛論」を女性たちに強要したことは、彼女らに与える損失を無視した身勝手な行動であり、第2に、諸条件が整っても、「男女の生理上の違い」が残っているため、やはり「自由恋愛論」は空論である、というものである。第1の論点にかんしては、経済的下部構造や革命の必要性という論点を除けば、荒畑の批判とほぼ同一である。「多角恋愛」を実践するには社会的諸条件が整っておらず、それを強行したことは女性にのみ不利益をもたらした、とする批判である。第2の論点にかんしては、「生理的なもの」という記述はおそらくリプロダクションのことを指していると思われ、妊娠のリスクに対する男女差があるかぎり、「多角恋愛」は女性に不利な構造を内包しているという批判である<sup>9)</sup>。この問題は、第2波フェミニズム以降、リプロダクション・ライツと自己決定権の問題として議論されてきた論点である。たしかに大杉たちの時代においては、女性の身体的自己決定権は確立しておらず、この批判は正当である。しかし現在においては、女性の身体的自己決定権は拡大しており、現在において「生理的なもの」を自由な恋愛の障壁とみなす意義は、減少しているといえるだろう(まったく存在しなくなった、という意味ではなく)。総じて、これらは「多角恋愛」を実践するには時代的・社会的状況が整っておらず、それを強行した大杉には女性の苦しみへの無理解が存在していた、という批判と解釈可能である。

### 3-2. 「多角恋愛」をめぐる問題

これらの諸批判は、それぞれに妥当な部分があり、肯首できる部分も少なくない。大杉が男性中心的なエゴイズムを発揮してしまったことは否めないだろう。しかし私には、すくなくとも大杉が自身の性的快楽充足のためだけに、「多角恋愛」なる概念を捻り出し「卑怯な空論」を展開してい

たとは思えない。

大杉という人物は、何事に対しても愚直なくらい不器用であった。要領よく立ち回ることが苦手な「損なタイプ」ですらあった。その性格が、むしろ彼の生涯にさわやかな印象すら与えていることは、現在でも大杉の人気の高さのひとつの理由といえるだろう。おそらく大杉は、かなり真剣にこの問題を考えていたはずである。単に多くの女をはべらせて快樂を得ることを目的とするならば、いくら大正時代とはいえ、ほかにいくらでも効率のよい方法があったはずだ。大杉がいかにも要領が悪かったとはいえ、これではあまりにも効率が悪すぎるのである。おそらく、大杉は本気で男女の恋愛関係を変えようと思っており、それを“実験”していたのだと思われる。

大杉は、一面では確かに助平な俗物であったが、一生涯を通じて彼自身のラディカリズムは一貫している。もちろん、対女性の問題にかんしてのみ不気味な支配手腕を発揮していたという可能性もあるが、残された発言からは、むしろこの問題に対しても他の問題に対してと同様の一貫したラディカリズムを示している。また大杉の言説の特徴として、明示的なミソジニーが比較的少ないことを指摘しておきたい。この点で、たとえば仲間内の殺し合いがイデオロギーとラディカリズムの果ての結果と見えながら、大塚英志(大塚, 1996)によってそのミソジニーを鮮やかに描き出されてしまった連合赤軍の男たちとは、大杉の態度と思想は根本的に立場を異にしている。たとえば大杉は、伊藤に宛てた書簡の中で、「新しい女」において、青鞥社を代表とする女性解放運動が、彼女ら自身が男性になり代わって「征服階級」になることを目論んでいると喝破しつつ(大杉, 2006:703)、返す刀で妻である堀保子に対する自分の言動の非道さを正直に書き綴っている。

しかし、考へて見れば、彼女の盲目とか醜悪とか云ふのも、厳密に云へば、彼女のものではないのだ。外からの、種々なる事情によって、塗りつけられたものなのだ。又、其の中には、僕との永い間の同棲関係、及び殊に最

近の僕の彼女に対する態度と云ふ事も多分に入っているのだ。(大杉, 2004: 480)

君は、どんなに僕が、保子に対して残酷であったかを知っているか。僕は、これほどまでに保子の心持ちを理解していたのに、そしてまた、彼女のいわゆる盲目や醜悪についての僕自身の十分な責任を感じていたのに、どうしても僕は、彼女に対して残酷な態度に出なければならなかったのが。彼女のいわゆる盲目や醜悪を見せつけられると、その嫌悪に耐えられないのと、およびおそらくはその責任を感じることに耐えられないので、一切を忘れて憤怒に捉えられてしまう。彼女のいわゆる盲目と醜悪とによって、僕までが、本当の盲目と醜悪とに陥ってしまう。彼女は号哭する。そして僕もまた、彼女の側に倒れて歎息する。(鎌田編, 2001: 90)

これを伊藤の気を引くためのポーズと解釈することも可能であろうが、正直なところ、不器用な大杉が恋愛に対してのみ突然そのような手際の良さを発揮したとは考えにくい。大杉は本当に泣いていたのではないと思われる。また、同じ書簡の中で大杉は次のように書いている。

僕はあなたにも又神近にも、謂はゆる扶養などと云ふ、そんな侮辱は与へる事は出来ない。又、ギチェヴェルサに(反対に)、そんな侮辱を与へられる事も許さない。けれども、やむを得ない必要の場合に、お互ひに助力し合ふ事が何で悪いのだ。(大杉, 2004: 480)

これは自由恋愛3原則の1番目、経済的独立の現実的な運用にかんしてのコメントである。これらの言説をみるかぎり、大杉は本気で「多角恋愛」を実践しようとの意志をもっている。これを実際には条件を満たしていないのに「多角恋愛」から性的快楽を得ようとした大杉の詭弁と解釈することも可能であろうが、根暗なオポチュニスト

であった大杉は、おそらく自らの理想の実践の方法を真剣に考えていたと解釈するのが自然であろう。

またその理想と現実の間で起こる軋轢(堀の嫉妬)にも、十分に痛みを感じている。伊藤への書簡の中では、堀に対する伊藤の優越的な視線に対しては恵まれた位置(=寝とった女)にいることを忘れるなど論し<sup>10)</sup>、神近のポジションについても「平気で人の亭主をねとって置きながら、その男をさらに他の女にねとられて、急に騒ぎ出した」と指摘している(鎌田編, 2001: 85)。

「お前が言うか!」と、読む者全員が突っ込みを入れたくなる箇所であるが、それと同時に大杉は自らの残酷さをそれ以上の調子で悔いてもいる。悔いながらも理想へと前進しようと、真摯に考え、必死に客観性をつなぎ留めて相互のポジションを見据えているとも解釈可能である。

もちろん、真摯であって、かつ善意であったからといって大杉の責任は解除されないし、非難に値する部分は多く残るだろう。しかし、善意で行ったことがなぜこういう結末を迎えてしまったのか、そこは善意であったことを踏まえううえで、検証する必要があると思われる。

日蔭茶屋事件への批判を見て一つ気がついたことは、大杉の態度や社会状況を無視した「無茶さ」を非難する声は多いものの、先に挙げた大杉の「多角恋愛」の3原則そのものを批判している意見はほとんど存在していないということである。大杉の提唱していた3原則そのものの妥当性は、当時から現在に至るまで疑われていないのである。考えてみればこの3原則は、恋愛とモノガミーがはらんでいる問題点を的確に把握していたといえる。100年以上も前である。それは、「多角恋愛」の3原則が、現在でも克服されていない問題点を見事に突いていたことを意味している。

しかも大杉の3原則は、理に適っているのみならず、現在でも検討する意義を十分に有している。そもそも1番目の経済的自立は、女性の自立のための必要条件である(十分条件ではないにしても)。経済的に男に依存している状態では、十分な自己決定は望めない。1980年代の男女雇用機

会均等法、あるいは男女共同参画社会といった近年の政策も、その根本には男女の所得格差の是正が課題として存在している。大杉の時代から現在まで、男女の所得格差は依然として存在し続けているのだ。

2番目の同居の解消は、家族制度の問題点と関連して、今日では理解できよう。家族システムとドメスティック・イデオロギーが、女性を制度的に劣位の存在とする権力装置として働いてきたことは言を待たない。したがって、同居家族のシステムを破壊することが必要であるのみならず、経済的・精神的自立のためには、同居は百害あって一利なし、というロジックである。この考え方は、現在でもかなりラディカルであり、本稿の主題である親密性と権力の核心部分に迫る視点である。

3番目の性的自由の保証は、1960年代以降のラディカル・フェミニズムでも中心的な課題として問題化されてきた論点である。経済的自立、あるいは政治的な平等が達成されても、実質的な不平等が解消しないのは、性愛に象徴される男女のプライベートな関係性そのもの、恋愛や性愛といった関係性そのものに権力が組み込まれているからだ、という問題意識である。第二波フェミニズムの有名なテーゼ「個人的なことは政治的である (personal is political)」は、この論点を端的に表現した言葉といえるだろう。

そのような問題群を、恋愛という概念すら一般的ではない時代に問題化し、しかも実践によって乗り越えようと無謀にも考えていた大杉の先進性には、「多角恋愛」の無残な失敗の経緯とはべつに、評価すべき点があったと思われる。

この大杉の先進性と徹底したリベラリズムについて、もっとも正当な評価を下していたのは秋山清である。秋山は、むしろこの一連の事件に対する社会主義者たちの批判や感想の中にこそ古風な性道徳観と女性蔑視を読み取っている。

女性解放問題の前に佇んでマルクス主義者たちは、階級闘争によってプロレタリア階級が政治権力を掌握するの後、女性解放はようや

く可能となる、それまで階級闘争のために女性解放運動は協力すべきだ、という考えを今も持っているが、—(中略)—労働者よ自らの解放は自らの手で、と主張してきたアナキズムは、女性の解放もまた革命の時にまで延期せよ、とはいわない。今日のたたかいを直ちにそれに向けよ、それこそが革命のための活動に直結する、という考え方に重点を置く。この観点を見失った者が、大杉の自由恋愛の主張は、一匹の雄が三匹の雌の占有を理論づけようとするもの、であったかのように誤解する。そしてそこには、現在の国家や権力階級にご都合のいい道徳観の埒内でしかない恋愛至上主義で、貞操感(ママ)などを内にひそめた、その実奴隷的な男女の関係をしか自分に納得できない者たちが蠢動している。(秋山, 2006: 194)

大杉を批判した社会主義者たちに対するこの秋山の辛辣な批判は、社会主義革命といったイデオロギイ的背景がなくなった現在でも、十分に通用するものである。この秋山の批判は、「社会的状況が整っていない段階では、自由恋愛は実践すべきではない」との見解への根源的な批判ともなりうる。社会主義革命の代わりに、家族制度、社会的賃金格差等、今日でも自由恋愛を潰すために援用可能な「社会的条件」はいくらでも存在している。しかしそもそも、そういった「社会的条件」そのものが女性を抑圧してきたのだから、その変革を待ってからでしか対等な男女の性愛の可能性を想像できないのであれば、それは事実上、永遠に女性は男性の性支配の桎梏から逃れられないことを意味する。「直ちにたたかい」を開始することを批判する男性は、自らによる性支配の継続を企図していると指弾されても仕方がないだろう。どの時代であれ、いつであれ、性支配の解体を望むものは、ただちにその闘いを開始すべきなのである。

#### 4. モノガミーをめぐるポリティックス

##### 4-1. 男性権力と依存

私は、大杉が批判されるべきは、時期尚早に「多角恋愛」の“実験”を開始したことではなく、別の点にあると考える。「多角恋愛」の問題点は、「多角恋愛」なる概念があくまでも大杉の概念であって、彼一人が操作可能であったということである。提唱者が「多角恋愛」とはなにかを決定する権利と解釈権を一手に握っていたことが、このプロジェクトが失敗した最大の原因であると考えられる。それに付き合う人々は、どうしても従属的にならざるをえなかった。皮肉なことに、「導く男」と「導かれる女」という男性の優位性が、女性の自立を目指す関係においても成立してしまっていた。女性の自立や解放を目指しながらも、思想的には大杉が「主」で、神近や伊藤は「従」であったといえる。第一にこの構造が致命的であった。

それでも、大杉と伊藤には、彼らが書いた文章や近親者の証言をみるかぎり、精神的には自立し平等な関係を築こうとした痕跡がある。しかし、その関係を結果的に第三者の立場に立たされた神近が見た場合、「話が違うじゃないか、私にばかり自立を求めて、伊藤を依存させているのはどゆこと?」、という話に映ったのではないだろうか。

そして、神近との関係性の問題も存在していた。神近は、性規範において元来きわめて保守的な人物であった。それは日蔭茶屋事件による服役後、間をおかずに結婚したこと、戦後に売春防止法の成立に尽力した際、彼女の性規範が保守的であったこと等からも推測可能である。むしろ彼女自身の性規範が保守的であるがゆえに、性の商品化に猛烈に反対していたともいえる。

同時に、神近は非常に依存心の強い人でもあった。誤解のないように言えば、それは神近個人のパーソナリティの問題というよりも、地方出身女性の平均的な生育環境に由来するものと解するほうが妥当であろう。実際のところ神近は、日蔭茶屋事件の少し前から、大杉に対して驚くほど依存

的な行動を取るようになっていた。大杉を独り占めしようとし、それが叶わないと思うと「私はあなたを殺すことにしました」と攻撃的になってみたりと、典型的な「男に振り回されている女」状態に陥っていた。

男性による承認欲求を強く持っていたと思われる神近にとって、男性＝大杉に承認されることは、大杉が望むような「女」になることを意味していた。その帰結として、大杉の「多角恋愛」という概念に、馬鹿正直なくらい自分を合わせようと無理をし、その矛盾が嫉妬という回路を通じて表出したとも考えられる。

この点においては、伊藤ははるかに冷静で客観的であった。伊藤は当初大杉の提案に難色を示すものの（とくに性的自由の尊重にかんして）、やがて大筋において理解を示すようになる。しかし理解を示ししつつも、その時点で遂行可能なこと、不可能なことを冷静に見極め、不可能な点については、遠慮なく大杉に支援を求めている。

神近に比して、伊藤は大杉を理解していたともいえる。少なくとも伊藤は、経済的自立が社会的に難しいこと、それを大杉が支援することは依存とは別物であること、経済的支援によって支配はされず、精神的・思想的に対等な関係が可能として存在しており、大杉もそのことを理解していた、伊藤を経済的回路を用いて支配しようとはしていない、ということを理解していた。

しかし神近には、この大杉と伊藤の関係が、ズブズブの依存関係にしか見えなかった。大杉と伊藤が共有していたであろう、共感と自立に基づく尊敬の関係を理解し得なかった可能性がある。それは、神近自身の想像力の限界であったともいえる。つまり大杉は、神近というもっともふさわしくない相手に、無理やり似合わないことをやらせようとしていたともいえる。一言でいえば、相手を見誤っていたということになる。おそらくは時間をかければ神近も「多角恋愛」の意義を納得した可能性もあったかもしれないが、大杉は早急にことを進め過ぎた。

そして、ここで想起される疑問は、なぜ、そんなことになったのか、ということである。おそらく

くこれが最大の問題なのだが、大杉は、残念ながら、結局のところ神近を「資源」としてしか見ていなかったのではないかと考えられる。大杉にとって、「多角恋愛」はアナーキズム運動と同じく、達成すべき革命であった。その革命のために、神近は（そして伊藤も）動員されたといえる。大杉にとって重要なことは、「多角恋愛」の実験を成功させ、世の中の男女関係のあり方を変革することだったのであり、神近や伊藤の「幸福」ではなかったのではないかと思われる。

これまた誤解のないようにいえば、「幸福」とは、なにもモノガミーによってのみ達成されるべきものとはかぎらない。大杉の考えた「多角恋愛」によって、神近が「幸福」になれた可能性すら、本来は存在していたかもしれない。しかし、そのような「幸福」を神近と分かち合うには、神近の「幸福」とはどのようなものなのかに対する想像力と共感が、大杉に欠けていたことは間違いない。とくに神近の場合、彼女は本来保守的な性規範を持っていたのだから、ゆっくりと時間をかけて、神近の性規範と一緒に検証し、彼女の葛藤にひとつひとつ付き合っただけでそれらを解決し、神近も納得できる形での「多角恋愛」の在り方を一緒に探ってゆくべきであった。

しかし、大杉にとって重要なことは、自分が思い描いた「多角恋愛」を実現させることであり、神近がどのような「幸福」を求めている、それが自分とは異なっているかどうかにも関心がなく、異なっていた場合にどのように擦り合わせを行うかといったことへの配慮も欠けていた（この点は伊藤に対しても基本的には同じであった）。この意味で、大杉にとって神近は自分のビジョンを実現するための資源でしかなく、これでは刺されても仕方がなかったといえる。

多角恋愛に疲れて何度も別れを切り出した神近に向かって、大杉は「僕は多角恋愛の実験をしているんだ。君がついてこれないのは思想的未熟さのせいだ」と言い放った事は先に紹介した。これでは、大杉は、神近は自分のために存在していると考えていたと解釈されても仕方がない部分がある。神近はいわゆる“新しい女”として高度な

教育を受け、経済的にも自立可能な存在であった。しかしそういう神近だからこそ、成功不安や男性と対等になることに対する恐怖感、セクシュアルな回路を通じた承認を強く求めており、大杉はその神近の弱点を十二分に利用したのである。大杉と伊藤の関係を知った神近が「だまされた！」と狂乱していた様子が伝わっているが（杉山，2003：139）、これはモノガミーを強く求めざるをえなかった神近にすれば、当然の反応であったろう。

実際、大杉からみれば、神近の思想は「未熟」だったかもしれない。そもそも彼女は大杉に認められたくて、大杉の望むような女を演じていただけなのだから。もし大杉に、神近に対する想像力がもう少し存在していれば、事態はかなり異なっていたであろう。神近の葛藤が「未熟さ」としか映らなかったのは、大杉の神近に対する共感の低さの証拠であり、大杉の想像力の限界でもあった。大杉は、この神近に対する想像力の欠如の一点をもって、厳しく批判されるべきである。理想を追い求め、強くありたいと願う自分を、他人にも強要し、他人を資源として、その犠牲のうえに自分のあるべき姿を確立しようと企てたのだから。その意味において、大杉と神近は、意外なことに、深く依存し合っていたといえる。

#### 4-2. 「多角恋愛」の評価と「結果的モノガミー」

ところで、大杉の3原則にはもう一つの論点がある。それは「お互いの自由（性的すらも）を尊重すること」という3番目の項目である。この原則で注意が必要なのは、「性的すらも」という表現をとっているものの、その中心は「性的においてこそ」という含意が存在していたという点である。実際には、性的要因がこの関係の中心に存在していた。「多角恋愛」とは、とりもなおさず「多角的性関係」のことを指していたのである。当時大杉の同志たちが猛烈に反発し、離反していったのも、この点においてであった。同志たちの視点は、「性＝人格」というイデオロギーに満たされていたことは言うまでもないが、その点は、ここ

まで紹介してきた後年の研究者たちにも共有されていると言っている。

それは大杉たちにおいても同様であった。大杉は日蔭茶屋において刺される直前に神近との性交渉を「われわれはもはやそういう関係ではない」と拒絶して神近の逆上を呼んだとの説もあり（神近は否定）、また伊藤への書簡においても、伊藤が「変化」できるかどうかの試金石として、快楽を目的とした性的関係や性的な関係における自由の尊重（もちろんそれは大杉の自由という意味であるが）を何度も強調している。

もちろんこの性愛重視の視点は、神近にも共有されていた。神近は伊藤に対しては激しい対抗心を燃やしていた反面、大杉に長年寄り添ってきた堀に対してはほとんど言及していない。あたかも最初から堀は問題ではないかのような態度であった。神近が堀を無視していたのは、彼らの関係がセクシュアリティを基盤とするものと、暗黙のうちに捉えていたからではないかと推測できる。当時、病身の堀と大杉の間に性的関係があったとは考えにくく、それに反して伊藤とは性的関係が歴然と存在していたからである。

すなわち、親密性としての性的関係が最大の問題となっていたのである。性的関係におけるモノガミーこそが神近にとっては圧倒的な承認であり、それ以外の承認（たとえば経済的独立を果たすなど大杉の意に沿った女になること）は、伊藤との性的承認回路の存在感の前に吹き飛んでしまっている。おそらく意図せざる結果として、大杉は親密性の権力を存分に神近にふるっていたことになる。それは、モノガミーが内包する圧倒的な承認のパワーであり、権力関係がそれをふるう者とふるわれる者との間の共犯作業であることの、典型的な例であるともいえよう。

ところで、神近が強烈に伊藤を意識していたのに対して、少なくとも表面上は、伊藤は神近に対してそれほど強い関心を示していない。大杉との間で日蔭茶屋事件の数か月前に交わされた往復書簡においても、伊藤はほとんど神近に関心を払っていない。もちろんこれを「恋の勝者」としての余裕であると見做すことも可能だろう。しかし、

伊藤は「私は保子さんには好意を持たないかわりに悪意も持っていません」と言いつつも、堀について多くの文字数を割いて言及しており、堀と大杉の関係を探りつつ、意識し、逡巡している様子が窺える。

そのように考えたとき、伊藤のもう一つの特徴が浮かび上がる。大杉と同志的愛情で結びついてきた堀は、いわば性的結合以外の結合回路を大杉と共有している。そして、それこそが伊藤が大杉の関係において発揮できるもっとも優越した素養なのでもあった。伊藤は、神近が元来「多角恋愛」の意義や革新性など理解しておらず、たんに大杉に認められたいがために演技し、葛藤を抱えていることを、おそらく見抜いていた節がある。したがって伊藤にとっては、神近などものの敵ではなかった。伊藤は、「多角恋愛」といいながらも、大杉と神近の関係については、日蔭茶屋事件まで伊藤はほとんど傍観者であった。しかし、堀はいわば伊藤と「かぶっている」存在であった。そのため、伊藤としては、大杉の堀への感情や関係に神経質になっていたと思われる。

井手文子は、日蔭茶屋事件の関係者の中で、もっとも強烈に女の実感と本能を押し出したのは伊藤であり、女の肉体を張って、本能の要求に従い、大杉と一体となり大杉の子供を産み、彼女の宇宙を完成させたがった、そのために大杉を独占することは欠くことのできない条件であったと論じている（井手、1979：145）。しかし、ここまでのモノガミーと性愛の権力の検討からは、井手の見解は肯首しかねる。結果的に伊藤が「恋の勝利者」となり大杉の子供を出産したことから、井手はこのように考えたのかもしれないが、そのような解釈は、伊藤の冷徹な知性とその知性と感情のバランスを達成する冷静な意思の力に対する冒涇であるように思われる。伊藤にとって「多角恋愛」も、あるいはモノガミーな関係でも、どちらにおいても性的な要素は、必ずしも中核的なものではなく、大杉もまたそうであることを知っていたともいえるのではないだろうか。そのことが伊藤の堀への意識から窺えるのである。それはとりもなおさず、「脱－《ファルス》権力」への契機

でもあったことを意味しており、親密性の権力の楔からの解放の芽が存在した可能性を示唆している。

そのことを考えるとき、一つの事実が考察への契機を与えてくれるだろう。それは、大杉は言動において、思想と実践の一致という点で一貫しているにもかかわらず、なぜその後、伊藤とのみモノガミーな関係を結んだのか、という点である。大杉が日蔭茶屋事件で「現実からしっぺ返しをされ」て委縮し、懲りてしまい、あるいは転向し、モノガミー信者になったとは思えない。不器用な大杉は、また懲りない人間でもあったからだ。そして大杉には、少なくともこの事件によって自己の信条を変更した形跡は、残された言説から判断するかぎり、見当たらないのである。

一方で伊藤であるが、彼女は日蔭茶屋事件の数か月前に大杉と交換していた書簡をみるかぎり、当初は戸惑った様子はあるものの、おそらく「多角恋愛」のビジョンを理解し、共感もしていたようである。もっとも大杉にとって、伊藤もまた神近と同じく自分の革命のための資源と映っていたはずである。しかし、伊藤はおそらくそれすらも理解したうえで、大杉と行動を共にしてゆく。

それは、経済的な協働といったレベルの話ではない。伊藤の言動をみると、彼女は「多角恋愛」という概念を理解し、共感すら覚えていたことが窺える（たとえば「自由意志による結婚の破滅」での論調など）。精神的な独立を得るために、共感と尊敬に基づいた新たな男女関係を模索するために、大杉と行動を共にしてゆく。おそらくその可能性は、彼女の周囲の男たちの中では大杉にしかなかったと推測できる。

また伊藤は、大杉を「愛して」いたと思われる。しかし、それは承認を与えてくれる相手を独占するという意味での「愛している」とは異なり、新たな世界の創造のパートナーという意味であったろう。やはり伊藤こそ、大杉の最大の理解者であり、対等なパートナーであった可能性を指摘しておくべきだろう。そのような相手を持てたことが、大杉の恵まれた点であり、そういう相手を呼び寄せたことが、大杉が天才たるゆえんとも

いえる。

つまり大杉と伊藤の間では、「多角恋愛」として達成を目指していた関係が成り立っていた可能性がある。大杉は、伊藤と2人で「多角恋愛」の“実験”を行っていたのである。それでは、多角ではない（語義矛盾）、ということになってしまうが、大杉と伊藤の関係は単なる承認と依存に基づいたモノガミーとは異なっていたことも事実である。

すべての新しい試みが、最初から完全にゆくことはない。そこには必ず、無経験に起因する混乱や、失敗があるのが当然だ。—（中略）—それが他のすべてと同じに、失敗にか無用にか終わるとしても、自分は正しい行為をしている、自分には落ち度がないという自信は、自分の根本の態度を支配するスピリットに対しては必要であるが、その行為のデテイルに対してまでそれをふりまわす事は、大抵の場合に危険だと私は思う。（伊藤、1970：290）

日蔭茶屋事件の後に書かれた伊藤の「自由意志による結婚の破滅」というこの文章は、十代の頃に恋愛結婚に走り、失敗した自分の経験を書いたものであるが、この引用部分は事件を経験した伊藤の経験知とも読める部分である。伊藤の「多角恋愛」に対する態度は、この文章に沿ったものであった。大杉との生活を続けながら、育児と大杉との協働作業に追われ、社会的な活動こそ赤爛会の設立にかかわる程度に留まったが、伊藤はその後も旺盛に文筆活動を行っており、その舌鋒は衰えることがなかった。また1922年には、一時的に別居も試みている。これまた「多角恋愛」の原則の1つであった。この別居は諸々の理由により一カ月余りで解消されたが、「多角恋愛」の“実験”は地道に、かつ条件を慎重に整えながら、大杉と伊藤の2人の間で続けられていたのである。別居の間にも大杉との書簡のやり取りは続き、大杉も十分に愛情をもって応えている。

相互に承認を介して依存しあい、支配しあうの

が、多くのモノガミーの特色である。しかし大杉と伊藤の関係ではこの要素は少ない。大杉と伊藤の関係は「結果的モノガミー」とも言えるようなものであったと思われる。本来は多角的に達成されることが想定されるが、伊藤以外の相手では成り立たなかったため、結果的に伊藤との間でのみ成り立っていた新たな関係、であったとも言えるだろう。

そのように考えると、大杉の「多角恋愛」の実験は、失敗例であったと同時に、成功例でもあった可能性がある。神近との間では失敗し、それをもって恋愛と性的自由への企ての失敗例と考えられているが、密かに伊藤との間では成功していたのかもしれないのだ。伊藤と大杉の間にあった、自立と共感と尊敬に基づく関係性、そのような関係性はどのように再現可能なのか、検討に値する課題だと思われる。それが明確になったとき、私たちはモノガミーの呪縛から解放されるだろう。それは、「結果的モノガミー」であってもいいし、「多角関係」であってもかまわない。問題はそこには存在していない。ということが明らかになるだろう。それこそが、次に考えるべき課題ではないだろうか。

#### おわりに

男性が女性に対して行使する権力は多岐にわたる。しかし、経済的・制度的な権力は、それがいかに破壊力があり支配的なものであっても、公的領域におけるものであるかぎり、公開での議論が可能であり、パブリックなコンセンサスを変化させることが論理的には可能である。しかし恋愛を中心としたプライベートな権力行使は、それがプライベートな性格をもつがゆえに、変革への社会的なコンセンサスがえにくい性質を有している。のみならず、それらは女性の存在としての存立基盤に作用する権力であり、女性にとっては文字通り致命的な影響力を与えるものである。社会的に活躍している女性でも、あるいは活躍したいと希望している女性でも、この領域の権力にはきわめて脆弱である。そして男性個人および男性社会

は、その女性の脆弱さを精確に狙い撃ちしてきたといえる。

その意味で、本稿で検討した大杉と伊藤の“実験”は、この領域に重要な問題提起をしていた。それは親密性の新しい形の模索であり、モノガミナ男性権力から恋愛と親密性を解き放つための試行錯誤でもあった。それは「結果的モノガミー」ともいえる状況に落ち着き、かつ大杉と伊藤が若くして軍部に虐殺されてしまったために、未完のプロジェクトとして放置されてきた。本稿は序論としてこの問題の基礎的な意義を考察するに留まったが、今後このケースを手掛かりにして、親密性を媒介とした男性権力の解体の方向性を検討する必要があるだろう。それが、女性の解放と、男性自身を差別者から解放するという、ポジショナリティの楔を断ち切ることにつながることだからだ。そしてその際には、ポストコロナリズムの知見を縦横に導入することが肝要と思われる。

#### 注

- 1) 近年の恋愛論として、様々な角度から真摯に論じたものとして、伊田広行の『シングル単位の恋愛・家族論』がある（伊田, 1998）。散漫になりがちなこのテーマを基礎的理論から実践アドバイスまで一定の視点で貫いてまとめた労作である。伊田はモノガミーを「二者排他性」という術語で論じ、後に紹介する大杉栄の「多角恋愛」の概念ときわめて近似した見解を示している。ただし伊田の解釈では、モノガミーは恋愛における安定性の要求に基づいた相手の独占を制度化したものであるとされ、本稿の立場とは異なっている（伊田, 1998: 213-214）。この見解の違いはモノガミーの権力を考える際に興味深い論点であるので、稿を改めて論じたい。
- 2) 以後の歴史的経緯にかんしては、秋山（2006）、井手（1979）、伊藤（1970）、岩崎（1963）、鎌田（2003）、鎌田編（2001）、神近

- (1997)、大杉 (1971; 2004)、の記述から再構成した。
- 3) 大杉の人間像は複雑であるし、彼の幅広い言論や活動についてはそれを論じた多くの文献があるためここでは言及しない。一種の英雄的存在として知られる大杉だが、残念なことに本稿に登場する大杉の姿は、あまり英雄的ではない。
  - 4) たとえば相手の頭目の懐に飛び込むこのような戦術が、大杉の英雄的肖像を形作ってきたエピソードの一つである。また、この「まとまった金」は、後藤によるものではなく、『種の起源』の原稿料であったとの説もある (田中, 2006: 13)。いずれにしろ、この時期に大杉の懐が一時的に暖かくなったことは間違いない。
  - 5) 大杉は当初一人で葉山に行く予定であったが、当時茅ヶ崎に住む平塚らいてうを訊ねたいという伊藤の申し出により、急遽2人で出かけることになった、と言われている (岩崎, 1963: 301-302)。
  - 6) 神近の自伝によると、このとき大杉は「ワーッ!」と大声をあげて混乱していたとあるが (神近, 1997: 174)、大杉の自伝によると、大杉は寝入ってはならず、傷を受けた後「待て!」と叫び、階下で宿の従業員に伊藤への連絡や神近の搜索を冷静に依頼した、となっていて (大杉, 1971: 264-266)、食い違っている。このように、日蔭茶屋事件においては、相互の感情や認識のみならず、事実関係の証言すら食い違っている部分が多く、混乱と当事者の自己美化の痕跡がみとれる。
  - 7) ちなみに、恋愛という概念自体は、Romantic-Love の訳語として「情熱恋愛」とともに明治20年代に日本に定着した。
  - 8) ただし、これらの大杉像は後年の神近の懐述に引きずられている観があることは指摘しておきたい。
  - 9) ちなみに飛矢崎は、大杉の最大の失敗点は、神近に対する思いやりの欠如であると指摘し

ている。恋の敗者である神近に対しては、思い遣り、やさしさが必要であったにもかかわらず、それとはかけ離れた対応を取ったことが状況を悪化させたと言及している (飛矢崎, 2005: 147)。

- 10) これは伊藤の「私は保子さんには好意を持たないかわりに悪意も持っていません」との書簡へのコメントである。

#### 参考文献一覧

- 秋山清 2006『大杉栄評伝』ばる出版  
 荒畑寒村 1975『寒村自伝・上』岩波文庫  
 Butler, Judith 1990 *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, (竹村和子訳 1999『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』) 青土社  
 Fineman, Martha. A 1995 *The Neutered Mother, The Sexual Family and Other Twentieth Century Tragedies*, (上野千鶴子監訳・速水葉子, 穂田信子訳 2003『家族、積みすぎた方舟—ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房)  
 藤本由香里 (白藤花夜子) 1999『快樂電流』河出書房新社  
 Giddens, Anthony 1992 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Society*, Polity Press. (松尾精文, 松川昭子訳 1995『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房)  
 飛矢崎雅也 2005『大杉栄の思想形成と「個人主義」』東信堂  
 伊田広行 1998『シングル単位の恋愛・家族論—ジェンダー・フリーな関係へ』世界思想社  
 井手文子 1979『自由それは私自身—評伝・伊藤野枝』筑摩書房  
 池田緑 2003「男性言説をめぐるポリティックス」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』12: 17-38

- 池田緑 2004 「“男女共同参画”とその社会的言説—産業社会と寛容さをめぐって—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』13：9-23
- 池田緑 2005a 「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅰ—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』14：55-77
- 池田緑 2005b 「平等，寛容，想像力，そして植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅱ—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』14：79-99
- 池田緑 2006 「おばけは生まれ変わることができるか？—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅲ—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』15：15-38
- 池田緑 2007 「男女共同参画の物憂いための息—労働と選択の視点から—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』16：49-66
- 池田緑 2008 「承認の政治における男性権力—モノガミーと性愛の植民地主義への基礎的考察—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』17：43-61
- 伊藤野枝 1970 『伊藤野枝全集・下』學藝書林
- 岩崎呉夫 1963 『炎の女—伊藤野枝伝』七曜社
- 鎌田慧 2003 『大杉栄—自由への疾走』岩波現代文庫
- 鎌田慧編 2001 『大杉栄語録』岩波書店
- 神近市子 1997 『神近市子自伝』日本図書センター
- 加藤秀一 2004 『<恋愛結婚>は何をもたらしたか—性道徳と優生思想の百年間』ちくま新書
- 桐野夏生 2006a 『グロテスク(上)』文春文庫
- 桐野夏生 2006b 『グロテスク(下)』文春文庫
- 森まゆみ編 2001 『吹けよあれよ風よあらしよ—伊藤野枝選集』學藝書林
- 永畑道子 1981 『炎の女—大正女性生活史』新評論
- 野村浩也 2005 『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
- 小倉千加子 2001 『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書
- 大杉栄 1971 『自叙伝・日本脱出記』岩波文庫
- 大杉栄 2004 『愛蔵版ザ・大杉栄—大杉栄全一冊』第三書館
- 大塚英志 1996 『「彼女たち」の連合赤軍—サブカルチャーと戦後民主主義』文藝春秋
- Sedgwick, Eve. K 1985 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press, (上原早苗・亀澤美由紀訳 2001 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)
- 杉山秀子 2003 『プロメテウス—神近市子とその周辺』新樹社
- 田中ひかる 2006 『月経と犯罪—女性犯罪論の真偽を問う』批評社
- 上野千鶴子 1998 『発情装置—エロスのシナリオ』筑摩書房
- 上野千鶴子・小倉千加子 2002 『ザ・フェミニズム』筑摩書房

## **Power of Intimacy and Colonialism : Basic Consideration to Sexual Love and Power**

MIDORI IKEDA

*School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

### **Abstract**

The post-colonialism theory analyzed that although it was already dissolved as a system, it has still continued substantially. The situation over the gender inequity is a prime model example. Male society takes the imagination away from women through intimacy and monogamy and dominates them.

By examining concepts and practices of “free love” of OSUGI Sakae, an ideal method of new intimacy separated from male power was examined.

### **Key Words** (キーワード)

gender (ジェンダー), positionality (ポジショナリティ), male's power (男性権力), colonialism (植民地主義), post-colonialism (ポストコロニアリズム), monogamy (モノガミー), sexual love (性愛), other recognition (他者承認), phallus (ファルス), intimacy (親密性), romantic-love (ロマンティック・ラブ), dependence on male (男性依存), hikagechaya-jiken (日蔭茶屋事件), “free love”(多角恋愛), OSUGI Sakae (大杉栄), ITO Noe (伊藤野枝), KAMICHIKA Ichiko (神近市子)